

地域と大学による協働事業の参加型評価 —能登での実践から見えること—

北村健二¹⁾・宇都宮大輔^{1,2)}・伊藤浩二³⁾

¹⁾能登 SDGs ラボ (〒927-1462 石川県珠洲市三崎町小泊 33-7 金沢大学能登学舎)

²⁾珠洲市自然共生室 (〒927-1462 石川県珠洲市三崎町小泊 33-7 金沢大学能登学舎)

³⁾岐阜大学地域協学センター (〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1)

1. 本稿が目指すこと

本稿は、著者ら自身が石川県能登半島地域において実施した、地域協働事業の成果に関する参加型評価の事例をもとに、その方法や結果について考察したものである。参加型評価の対象事例は、地方自治体（石川県珠洲市）と教育研究機関（金沢大学）による地域づくりのための協働事業である。本事例の学術研究としての成果は、査読付き英語論文の形で発表されるところまで既に至っている¹⁾。しかし同時に、一連の研究サイクルのなかで著者3名が対話を重ね、英語論文では必ずしも丁寧に扱うことのできなかつた考察も生み出されてきた。また、日本国内で参加型評価に関心を持つ実践者や研究者たちとの間で私たちの経験を共有するには、日本語による発信も必要となる。以上が本稿執筆の背景である。

本稿が扱う参加型評価の文脈をここで簡単に整理しておきたい。社会課題解決のためのひとまとまりの取り組み（プログラム）を対象とする評価の系譜のなかに参加型評価があり、参加型評価のなかにも多数の系譜がある²⁾。本稿で紹介する参加型評価実践は、複雑な社会課題に対する中長期的なプログラムが、参加型の評価を通じて順応的に改良されていく発展型評価³⁾の性質を意識したものである。ある特定の活動の短期的かつ目に見える成果（例：イベントの参加者数、商品の売上高）を数値で測るだけでなく、より中長期的な波及効果を扱うことも発展型評価では重要となる⁴⁾。これも本稿の実践事例に含まれる特徴である。

本稿の構成は、前半と後半に大きく分かれている。前半では、実践した参加型評価の背景、方法、結果、考察の概要を紹介する。後半では、著者3名が座談会形式により、地域協働事業に関する参加型評価について著者それぞれの個人的な見解を連ねていく。参加型評価実践の設計から成果発信まで一通りの研究サイクルを完結させていくなかで、英語論文で扱った枠組みを超えた副次的な考察も生まれた。これらの新たな考察は、社会貢献と研究の関係性や、専門分野の違いを超えて研究者が協働することの意味など、より一般性のある「高次（メタレベル）の考察」ともいえるものである。今後、多様な主体の協働による事業の波及効果を参加型で評価するあらゆる場面で、本稿の議論が多少なりとも参考になることが著者たちの希望である。

2. 能登における参加型評価実践の概要

2-1. 対象事例と背景

対象となった事例は、石川県珠洲市と金沢大学が「金沢大学能登学舎」を拠点として実施してきた協働事業である。少子化のため閉鎖された小学校の校舎を再利用する形で、2006年に能登学舎が開設され、それ以来、いくつかの項目からなる協働事業が実施されてきた。まず「里山」をキーワードに据え、自然環境の学習・保全・活用や、第一次産業を中心とする里山での生業確立、都市に住む人々との交流などの事業が実施された。これらの事業の波及効果として、「能登の里山里海」が2011年に国連食糧農業機関から世界農業遺産の認定を受けることにつながった⁵⁾。

珠洲市と金沢大学の協働事業の核は人材育成事業である。「能登里山マイスター」養成プログラム（2007～12年）、「能登里山里海マイスター」育成プログラム（2012～19年）、能登里山里海 SDGs マイスタープログラム（2019年～）と名称、内容、財源などを少しずつ変えながら、10年以上にわたり継続してきた^{6,7,8)}。主たる育成対象は40代までの若手社会人であり、里山や里海の豊かな自然環境と資源を生かしつつ、過疎高齢化の進む能登地域の再活性化につなげたいという目的がある。能登学舎に特任教員と任期付き研究員が合計5名常駐する基本体制のもと、人材育成講座の運営と受講者の指導がおこなわれてきた。

外部資金で実施された第1期（2007～12年）が終わると、第2期（2012～15年）は複数の地元自治体と大学が独自財源から拠出し合う形となった。第3期（2016～19年）からは珠洲市と金沢

大学の2組織のみが年間2,000万円ずつ拠出する形となった。その際、珠洲市拠出分は金沢大学への寄附講座の方式を用いることとなり、「能登里山里海研究部門（珠洲市）」の名称のもと、正式に研究が協働事業に位置づけられた。2019年度からは「能登里山里海 SDGs 研究部門（珠洲市）」として継続している。

能登学舎での人材育成事業は外部からの表彰を受けるなど、一定の高い評価を得てきた^{9,10,11)}。外部からの視察や事例調査の依頼も毎年度複数件ある。また、能登での成果をもとにフィリピンのイフガオ州で地元大学が主体となり金沢大学の支援により「イフガオ里山マイスター養成プログラム」が2014年に開始した。これは、国際協力機構の「草の根技術協力事業」の枠組みによるノウハウの移転であり、能登での実績が評価されて実現したものである。

これまでこれらの協働事業の公式なプロジェクト評価は、委員会方式でおこなわれてきた。人材育成事業については運営委員会が設置され、毎年度の実績と次年度計画を議論している。研究についても運営評価委員会が設けられ、節目の時期に研究活動とその成果を評価するとともに、以後の方向性に関する提言をおこなっている。

以上のように、表彰・視察など（外部からの評価）や、委員会による評価（制度化された公式の評価）が継続的におこなわれてきた。しかしその一方で、これらの方法では必ずしも十分に扱われてこなかった領域がある。それは、協働事業の運営に直接従事してきた関係者の見解である。客観的な評価だけでは見落とされがちな、内部者ならではの主観的な評価が加わることで、より多角的な評価体系が完成すると考えられる。そこで、著者らは2018年に参加型評価を構想し、関係者の協力により実践することとした。

2-2. 方法

まず、参加型評価の「参加」の対象者として、珠洲市役所および金沢大学において一定期間（2018年3月時点で直近2年以上）にわたり、協働事業の運営に従事してきた自治体職員および大学研究者と定義した。評価の方法としては、事業実施によって生じた最重要の変化を「物語」の形で集めて選択するMost Significant Change (MSC)手法¹²⁾を活用することとした。MSC手法は、主として海外の非政府組織で活用されており、指標を用いず、定性的な成果や波及効果を具体的な逸話を通して集めるところに特徴がある。著者の北村は、MSC手法の日本の第一人者である田中博氏が実施する研修を2015年に受講することにより、この手法を学び始めた。その後、関連文献を読むとともに^{13,14)}、田中氏との個人的なやり取りを通じてMSC手法や参加型評価について理解を深めることに努めた。その結果、能登の協働事業の参加型評価においては、MSCに独自の改変を加えた新たな方法を試行することが可能との見解を持つに至った。

独自に改変したのは主に以下の2点である。第一に、生じた変化の領域を実施主体の「内」と「外」の二つに分けたことである。従来のMSC手法での問いは基本的にただ一つであり、それは、事業実施により生じた変化を問うものである。事業の成果や波及効果は、通常、外側、すなわち裨益者側の変化として語られる。能登の協働事業に関しては、前述のとおり、内部者自身の視点を重視する狙いがあった。このため、生じた変化の領域を「実施主体（内側）」と「地域全体（外側）」に分けることで、実施主体である個人や組織、事業内容・方法そのものの変化（内側の成果や波及効果）を積極的に評価対象に含めることを意図した。

第二の改変点は時間軸の拡張である。従来のMSC手法では、過去から現在までの間の変化を問う。能登の協働事業に関しては、翌年度以降に新たな事業期間に移行する時期だったこともあり、将来に生じるであろう変化についても問うことにした。言い替えると、現時点でまだ実現していないが、将来実現すれば望ましい状態（変化）に関する問いである。そこで語られることは、現状の課題を映すものでもある。以上2種類の改変を組み合わせると、合計4領域の問いになる（表1）。

もう一つ重要な独自の考慮事項がある。それは、能登の参加型評価実践では、評価者の職位の違いを取り扱うことによる「横方向」の情報と認識の共有を最重要視したことである。従来のMSC手法では、現場レベル（スタッフ）から上位（リーダー、役職者等）に向かって物語が集められる。組織階層のなかで上位の者が、集まった物語から最重要と思うものを選択し、さらに上位階層の者に伝える、という方法が基本にある。これにより、現場感覚が組織階層の下から上に向か

ってサイフのように吸い上げられる効果がある。そして、最重要変化（MSC）を示す物語の選定結果が上から下に伝達されることで、情報共有が双方向となる。このような垂直方向の共有が MSC 手法の意義の一つである。一方、私たちの評価実践では、現場レベルでの関係者間の横方向の情報と認識の共有を最優先の目的とした。具体的には、関係者のなかの役職の階層の高低の差の影響を最小限に抑えるため、匿名化の工夫を採り入れた。以上の改変や狙いを加えていることから、ここでは「水平型 MSC 手法」¹⁾と呼んで、従来の MSC 手法と区別する。

表 1 独自改変を加えて重要な変化を問う 4 つの設問

	過去	未来
実施主体	Q1:協働事業そのものの内容・方法に関してこれまで起こった具体的な変化のうち、あなたが最も重要と思うものは何ですか？	Q3:協働事業そのものの内容・方法に関して、今後 3 年間に最も起こってほしいとあなたが考える重要な変化は何ですか？
地域全体	Q2:協働事業によって環境、社会または経済にこれまで起こった具体的な変化のうち、あなたが最も重要と思う変化は何ですか？	Q4:協働事業による環境、社会または経済の変化のうち、今後 3 年間にあなたが最も起こってほしいと思う重要な変化は何ですか？

私たちの水平型 MSC 手法による参加型評価の手順は、大きく 2 段階に分けることができる。第 1 段階はアンケート方式で、上記 4 領域に関する重要な変化の物語を収集した（2018 年 6～7 月）。設定した参加条件に該当する 10 名（市役所と大学それぞれ 5 名ずつ）に依頼し、大学側の 1 名が参加を辞退したが他の 9 名が物語を記述して提出した。なお、著者のうち北村は参加条件を満たしていないため評価の過程においては中立のファシリテーターの役割を果たすとともに、研究全体の企画と実施を主導する立場となった。9 名の物語は一旦、北村のみが受け取り、匿名化してひとまとめのデータ集に加工した。

第 2 段階は参加型ワークショップの開催で（2018 年 7 月）、物語を提出した 9 名のうち 7 名が参加した（大学側 2 名は別用務のため欠席）。集まった物語のうち、最重要変化を表すと思うものを各参加者が投票し、その理由とともに全体共有するというのがワークショップの内容であった。なお、投票対象は、自身が提出した物語を除外し、他の人が提出した物語から選ぶこととした（図 1）。4 領域それぞれの最重要変化に関する議論をおこない、最後に今回の参加型評価の実践の有用性についても議論した。

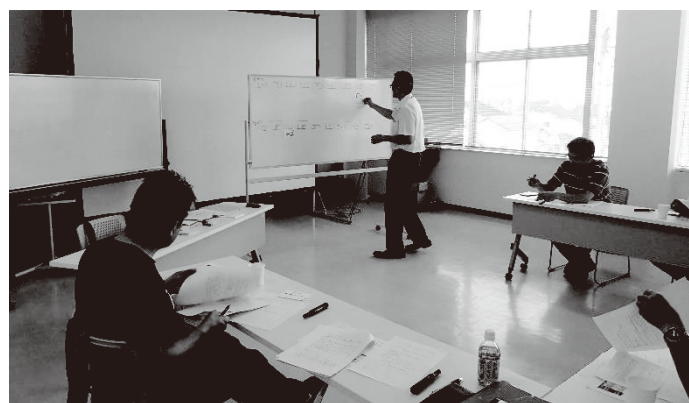


図 1 参加型ワークショップでの投票の様子（2018 年 7 月）

2-3. 結果

各領域において、多くの票数を集めた物語が示す変化の要点は表 2 のとおりである。実際にはそれぞれの物語がひとまとまりの文章で表現されており、9 人×4 領域で合計 36 編の物語集が揃ったことになる。参加型評価を実践したこと自体の意義や、その際に用いる水平型 MSC 手法の有効性については、ワークショップ後の意見交換やアンケート結果で概ね高い評価を得た。特に、物語の書き手を匿名にして投票する方法により、所属や役職に関係なく内容によって選ぶことが

可能となったことの意義が認められた。言い替えると、当事者間の多様な考えや価値観を、立場を超えた形で共有し、以後の計画策定に活用するための手段としての一定の有効性が認められた。

表 2 4 領域それぞれにおいて最多数の支持を得た物語のテーマ

	過去	未来
実施主体	行政と大学双方の主要人物や舞台裏を支える地域住民の間の綿密な対話	人材育成講座修了者を含む起業創業人材と支援のための資源マッチング
地域全体	若手人材が刺激し合う場の創出	地域課題解決志向で地域経済発展につながる形の人材育成講座

2-4. 考察

このような参加型評価は、委員会方式の公式評価では必ずしも扱われない現場当事者の認識を集めることから、公式評価を補完する役割を持ちうる。異なる評価方法の組み合わせにより、包括的な評価パッケージとなることに貢献可能である。特に今回の参加型評価実践においては、組織内の階層という縦方向の壁を取り除き、従事者が横一線に並んだ状態で見解を相互共有することを重視した。「水平型 (Horizontal) MSC 手法」と称するのはこのためである。

今後実施する際の課題も浮かび上がった。例えば、「変化」や「物語」という MSC 手法の中心的な用語や概念が、参加者にとって必ずしも日常的に用いないものであるという点が挙げられる。これらの概念に馴染むまで時間を要したこと、また、それにより、評価者各自が回答した物語が、評価企画側が期待していたよりやや抽象的になったかもしれないことが参加者から指摘された。用語の選択および説明や、物語の例の示し方に関して、参加者層や場面によって微調整するなど、更なる工夫の余地があることを示唆している。

以上が能登における参加型評価実践研究の概要である。英語論文の形で成果発信まで研究サイクルが一応の完結を見たところではあるが、著者陣の間では、この評価手法とその適用可能性についてまだ十分に語り切れていない考察がある。それを本稿の後半部分において座談会形式で示し、今後の参加型評価のさらなる活用につなげたい。

3. 参加型評価実践からの新たな考察

北村：ここから形式ががらっと変わり、著者 3 名による座談会形式で記述していきます。まず、簡単な自己紹介から始めましょう。

宇都宮：私は、金沢大学が「能登里山里海マイスター」養成プログラムを 2007 年にスタートさせる時、教務スタッフの立場で協働事業に従事することになりました。2015 年 4 月からは、現職である珠洲市自然共生室の自然共生研究員に転職しました。所属先は変わったのですが、勤務先は同じ建物で、大学連携も担当している部署のため、協働事業と無関係になることはありませんでした。2018 年からは、大学と珠洲市の協働事業の成果や優れた里山里海環境を経済につなげることを目指して設立された「能登 SDGs ラボ」のコーディネーターも兼務しています。立場の変化が多いのですが、同じ協働事業に、大学側と自治体側の両面から関わることになりました。専門は生態学で、参加型評価は初めての経験となります。

伊藤：私は宇都宮さんのおよそ 1 年後の 2008 年からマイスタープログラムのスタッフとして携わり、途中から現場教員のリーダー役を担わせていただきながら、2020 年まで従事してきました。プログラム創設者の先生方からこの事業にかける思いや地域との関わり方などを長年議論してきたほか、大学職員、自治体や地域の方々との付き合いも長いので、プログラムの変化については理解しているつもりです。生態学の研究者なので、プログラム評価を学術的に分析・考察するのは初めての経験でした。

北村：僕は 2017 年に伊藤さんの当時の所属と同じ金沢大学能登里山里海研究部門（珠洲市）に教員として着任し、2018 年から宇都宮さんと同じく能登 SDGs ラボに兼務となり、2020 年から同ラボの専任コーディネーターになりました。つまり、お二人とは、能登学舎という同じ建物のなかで地域協働の仕事をご一緒してきました。能登に移る前は、自治体職員や国際協

力実務家など色々な実務経験をあちこちで積んできた流れ者です。大学と大学院で3か所、合計7年の留学をしたり、コスタリカで現地調査を重ねるなど、研究者としても流れ者です。テーマとしては、土地や資源の共有制度など、環境保全と地域づくりの両立を可能とする仕組みの探求を続けています。同時に、参加型の学びや行動（Participatory Learning and Action: PLA）に関心があり、ファシリテーターの役割を常に意識しています。

3-1. 参加型評価実践によって生じた重要な変化（メタ MSC）

北村：最初の「お題」として、参加型評価を実践したことによって生じた「重要な変化」をお互いに共有したいと思います。本稿前半で紹介した参加型評価は「協働事業により、どのような重要な変化が生じたか」を問うものでした。一方、ここでの議論は、「その参加型評価を実践してみて、著者自身とその周辺にどのような重要な変化が生じたか」です。

伊藤：参加型評価の成果を、さらに参加型で評価すると。

北村：メタレベルのMSC手法と表現することもできそうですね。事前に、3名それぞれが、重要な変化を示すエピソードを1~3件の範囲で書きました。他の人のエピソードを先に見てしまうと、その内容にどうしても影響を受けてしまう可能性があるため、まずは個別にエピソードを書いて、そのあと共有する方法にしました。

伊藤：本稿前半最後にもあるとおり、2018年に参加型評価を実践した際には「物語」という表現を前面に出しました。そのせいかわかりませんが、内容がやや抽象的になった印象があります。そこで、より具体的な波及効果の話を集めるなら、例えば「エピソード」という表現を前面に出すほうがよいかもしれない、という議論を英語論文執筆の過程でしました。今回はそれを踏まえての問いになっているのですね。

宇都宮：「物語」や「変化」を自由記述で書くことの難しさは私自身も感じたことです。2018年7月のワークショップのときにもその考えを述べました。

北村：問いを作った僕としては、外来語やカタカナ用語を安易に使いたくないという思いがあり、2018年の設計時には「ストーリー」や「エピソード」という言い方を前面に出さないよう意識しました。「逸話（anecdote）」も難しいので使わず、「物語」を前面に出しました。しかし、これが最善の表現ではなさそう、という気付きは、実践による成果の一つです。日本語の「物語」は英語のstoryと比べると、架空の創り話の印象が強いことも一因かもしれません。「昔々あるところに……」を連想させやすいのでしょうか。いずれにしても、この気付きを生かして、今回の質問の主文の表現や補足の付け方は次のようにしてみました。

質問：珠洲市と金沢大学の協働事業の参加型評価研究を実施したことによって、あなた自身や周囲で生じた重要な変化は何ですか？

- ・ 対象とするのは、研究開始時点（2018年4月）から現在（2020年12月）までの期間に生じた変化です。
- ・ できるだけ具体的なエピソードの形で教えてください。
- ・ 提出していただくエピソードの数は1~3件の間です。
- ・ 最も重要と思われる変化を示すエピソード1件を必ず含めてください。
- ・ それ以外にも重要な変化が生じた場合には、重要と思う順に最大3件に絞って提出してください。
- ・ エピソードの文字数指定はありません。変化を過不足なく表現できる分量でお書きください。
- ・ エピソードに簡単な題名を付けてください。

北村：この問い方を見たときにどう感じましたか？ わかりにくさはあったでしょうか？

伊藤：参加型評価研究がもつ社会的インパクトや著者自身へのインパクトを評価するという視点の斬新さを感じました。ユニークな発想の持ち主の北村さんならはだと。

宇都宮：わかりにくさは無かったのですが、この問いを見て、自分自身のことと周囲のことの2点について考えてみると、周囲で生じた変化を説明することが難しそうだと感じました。

北村：なるほど。では、3名が書いたエピソードをひとつお見せしてみましよう。

<p>伊藤 1</p> <p>【題名】参加型評価の可能性への気付き</p> <p>【エピソード】MSC 研究のプロジェクトに参加して初めて自分自身が参加型評価の意義や価値、限界について気がつくことができた。複数の実施主体から構成される協働プロジェクトでは、それぞれの組織の文脈に沿った変化の感じ取り方がある。例えば、人材育成の現場に携わる者としてはカリキュラムや運営方法の工夫・進化に心血を注いできたことに誇りを持っていたが、市役所の立場からはそこよりも運営関係者同士のコミュニケーションの深化が重要だと感じていた。このように MSC では公式のプロジェクト評価の見解とは別に実施主体間の認識の違いや一致を顕在化させることができるので、それをもとに意見交換することで相互理解が深まりやすいのがメリットだった。</p>
<p>伊藤 2</p> <p>【題名】MSC を活用する主体の出現</p> <p>【エピソード】第一著者の北村さんらの働きかけで、SDGs や環境教育に取り組む学校関係者らに MSC を実践してみたいという声が上がリ、実現する可能性が生まれてきた。このことは、関係者に本手法の有効性と潜在的 가능성이理解された一つの大きな証だと思う。</p>
<p>宇都宮 1</p> <p>【題名】相互理解を土台にした連携体制の発展</p> <p>【エピソード】能登学舎に常駐する大学スタッフと市役所職員が意見を伝え合う場があったことで、お互いの考えの相違点と共通の課題がわかり、連携事業の体制作りや事業内容で発展がみられた。一つは、珠洲市の SDGs 未来都市宣言の採択に伴って設立された能登 SDGs ラボの運営体制に、能登学舎に常駐している金沢大学のスタッフが参画したことである。もう一つは、人材育成事業の改善を検討し、継続事業の内容を決める際に、珠洲市による SDGs 達成に向けた取り組み内容を反映させ、「能登里山里海 SDGs マイスタープログラム」が 2019 年 4 月にスタートしたことである。</p>
<p>宇都宮 2</p> <p>【題名】参加型評価の有用性に対する理解の促進</p> <p>【エピソード】研究として発表するにあたり、自分自身が参加型評価の方法や有用性について理解を深めることができた。また、今後の展望として私が関わる市内の各種事業において、効果検証と今後の継続に向けた検討を進める際に、水平型 MSC を活用できる可能性について認識できた。</p>
<p>北村 1</p> <p>【題名】「こんなんありませ」と言える自分</p> <p>【エピソード】北村が所属する能登 SDGs ラボの活動として、持続可能な開発目標（SDGs）に関する小学生の学習促進がある。教材作成と巡回授業を担当する連携研究員から、SDGs 学習の効果を検証するための研究を実施できないかと 2020 年 11 月に相談があった。その際、効果検証の一環として水平型 MSC 手法が有用かもしれないと考え、北村から提案した。現場実践に役立つ研究の方法論を自ら提案できることは、地域志向の研究者としてとても嬉しいことである。</p>
<p>北村 2</p> <p>【題名】人材育成ファシリテーションの効果検証も MSC で！</p> <p>【エピソード】能登里山里海 SDGs マイスタープログラムで北村が 2019 年度に担任を務めた受講生を対象として、修了 5 か月後の 2020 年 8 月に集まって MSC 手法を試行した。受講したことによる暮らし方の変化、視点の変化、多くの人たちとの出会い、構想の実行など、多様な変化に関する具体的なエピソードが集まった。うち 1 名の修了者のエピソードが北村の印象に強く残った。それは、空き家問題を題材にプロジェクト研究を実施した人のもので、問題解決のための自身の取り組みの主たる働きかけ相手が、「空き家を買いたい/借りたい人」でなく、実は「家の所有者」であるという気付きが起こったという話であった。この気付きは、受講期間中に担任とおこなった「2 人ワークショップ」のなかで生まれたものである。担任として北村は、受講生が「自ら気付く」ことを促すファシリテーションを常に意識してきたが、その効果を検証する手段がこれまでなかった。MSC 手法により、気軽な形で修了者からフィードバックを得られたことが嬉しかった。MSC が柔軟で使いやすい方法論であるという手応えも改めてつかめた。</p>

北村：今回は我々 3 名だけなので投票はしませんが、他の人のエピソードを見てどのように感じますか？

伊藤：立場は違えど同じ事象を見てきた3人だと思うが、それぞれにエピソードの視点が少しずつ異なっていて、これぞMSCの醍醐味、と感じました。自分が知らない新しい発見もありました。

宇都宮：MSCの活用の可能性を感じている点は、全員が共通して感じていることだとよくわかりました。

北村：論文執筆の過程で我々3人が対話を重ねてきたことがエピソードに表れていますね。日常的な意見交換が大きく作用することは、2018年のワークショップでも参加者が述べていました。手法の活用可能性は後ほど掘り下げましょう。他に僕が共感したのは、伊藤さんの1つめのエピソードにある「人材育成の現場に携わる者としてはカリキュラムや運営方法の工夫・進化に心血を注いできたこと」です。ここにもっと焦点を当てたいというのが、当事者による参加型評価を企画した大きな目的の一つでした。

3-2. 協働事業の仕組みや制度そのものを対象とする研究の意義と難しさ

北村：能登学舎での取り組みに関する参加型評価を研究として実践する直接のきっかけは、2018年8月に和歌山県で開催された東アジア農業遺産学会です。年度の初めに、我々能登学舎の研究者が積極的にこの学会で発表することを伊藤さんが促してくれました。そこで意を決して、以前からモヤモヤと構想していた参加型評価を急ぎ実行に移すことにしました。簡単な企画書とともに真っ先にお二人に相談しましたが、そのとき感じたことは何ですか？

伊藤：私や宇都宮さんは生態学者として人間活動が環境や生物に与えるインパクトを評価するのが仕事でしたが、人材育成事業のインパクトを評価することには正直腰が引けていました。なので北村さんのような研究者が正面から取り扱ってくれることに正直安心しました。

宇都宮：私は協働事業に携わるなかで、数値による評価だけでは十分ではない気がしていました。この話を聞いた時に、この抱えていたモヤモヤした疑問に対するアプローチの一つになるのではないかと興味を持ちました。なので、これはチャンスかもしれないので、関わってみようと思いました。ただ、あまりにも知識が無く、実力不足は明らかな状況だったため、どこまで貢献できるのかは不安でした。

北村：能登学舎における協働事業の仕組み、制度、運営ノウハウなどそのものを対象とする研究がそれまでほとんどおこなわれていなかったのではないかと、という印象が僕にありました。事業報告的なものは少なからず出ていたと思いますが、分析的な視点で研究の題材となることが少なかった、ということです。まずこの理解が正しいのかどうか？そして、正しいとすれば、何が制約要因なのでしょう？

伊藤：社会科学の分野で日々このような人材育成手法を研究している研究者らを差し置いて、生態学者が「にわか」で研究できるのかと、思っていました。その学術的裏付けをしてくれる北村さんのような研究者がコミットしてくれたのが第一かと。そして、実践知を明文化し共有する形の研究が成果として認められる「Journal of Community Practice」(注：本事例の論文である Kitamura et al. 2020¹⁾の掲載雑誌)、「地域志向学研究」のような学術雑誌が存在することが大事かと思えます。

宇都宮：協働事業の仕組みや運営ノウハウについては、事業報告の範囲を超えて研究成果としてまとめられたものはほとんどなかったと思います。その理由としては、主に二つあるのではないのでしょうか。一つは、伊藤さんもおっしゃっているように、この切り口で研究を推進するキーパーソンがいなかったことです。そのため、研究としてのアプローチや進め方がわからなかったことが大きな制約になっていたと考えています。もう一つは、協働事業の評価や検証を、事業報告で終わらせるのではなく、事業実施主体と連携主体と一緒にすべきだという共通意識が強くなかったことだと思います。

北村：僕自身は、能登に移る前に従事した「地域環境知」研究プロジェクトがまさに「仕組みや制度」を対象とするものでしたので、その視点で能登学舎の取り組みを学びたいと思っていました。実際、能登とイフガオも同プロジェクトの事例対象として含まれていたおかげで、書籍の一章の共著者として原稿を書かせていただき大変勉強になりました⁷⁾。それでも、分析的視点でこの事例を研究できた、と実感できるところまでは正直まだたどり着いておらず、

潜在的には研究対象としてもっと高い価値があるように感じています。今回の参加型評価実践はほんの小さな一歩にすぎませんが、仕組みや制度そのものを対象とした研究が何はともあれまず一つ形になったことは嬉しいです。将来的に、多様な専門性を集めて現場のチームを作る際には、仕組みや制度の設計・運用・評価など実施過程を研究対象とする研究者が一人くらい加わってもよさそうだとすることも分かりました。

伊藤：北村さんのような参加型評価を得意とする現場実践型の研究者がますます増えることを期待しています。ただ多くの地域協働事業の現場では複数のスタッフ・研究者を抱えることができる資金的余裕はなくなってきているのが実情です。この困難な状況を少しでも打開するためには、この水平型 MSC を一般的なアンケート手法に加えて、事業評価の有効な手段として誰でも使える手法として普及することもまた、現場で頑張っている我々のような研究者を助けることになるのではないのでしょうか。北村さんには今後適用事例を増やすなかで知見を増やし、ぜひノウハウの書籍化を期待しています。

3-3. 参加型評価における役割の重複

北村：2018年に参加型評価を実践する際には、宇都宮さんと伊藤さんは評価自体にも参加しました。アンケートによる物語の提出は2人ともおこない、さらに宇都宮さんはワークショップで投票者としても参加しました。同時に、研究の企画段階から論文執筆まで研究サイクルのすべてにおいて研究実施者側の役割も果たしました。このような役割の重複が、研究の客観性や妥当性を損ねる可能性があるという論点は、我々3人の間でも研究企画当初から提起されました。また、論文投稿後に査読者からも提起されました。このことについて、どう感じましたか？自然科学の研究者として、自分自身が対象となる研究に違和感を持ったことはありますか？

伊藤：正直最初は戸惑いがありました。理系では御法度ですからね。ですが研究者自身が研究対象に深くコミットしながらも客観的に学術研究するという「参加型アクションリサーチ」という手法があることを知ってたので、あながち間違いではないのだろうと思いました。文化人類学研究では参与観察と呼ばれるような研究手法ですね。社会科学の研究者がいいと言わないらいいんだろうと。

宇都宮：自分自身が研究者であり研究対象の一部となることは、初めてのことで困惑したのは確かです。また、客観性を保てるのかも気になっていました。研究方法の検討や北村さんと懸念事項を話すなかで、それぞれの場面で役割を割り切ることが出来ればなんとかなるかもしれないと考えられるようになりました。実際に参加者としてエピソードを作り、話を聞き、投票を行うと、観察するだけでは気付きにくいことが体感できるというメリットがあると感じました。参与観察と参加型アクションリサーチという研究手法の醍醐味を少し味わえたのかもしれません。

北村：この議論はとても面白いですね。すべてなるほどです。外部者が現場にしばらく滞在して、協働事業の実施過程に参加しながら観察すると参与観察になります。僕自身、コスタリカの現地調査などでは参与観察者となりました¹⁵⁾。観察者の振る舞いによる影響も考察対象となるものの、基本的には第三者視点からの調査です。今後、インターンシップなどを通じて外部者に能登学舎での地域協働事業を参与観察してもらえば興味深い知見が生まれるかもしれません。一方、今回の研究は、我々内部者自身が実践と研究を一体化させておこなった参加型アクションリサーチと解釈できます。地域志向型の研究では、既存の学問分野と比べて、参加型アクションリサーチを含む実践研究の割合が高くなるのだろうと思います。実際、『地域志向学研究』誌でも総説以外では実践研究が多い印象です。

宇都宮：なるほど。参与観察と参加型アクションリサーチには大きな違いがあるということですね。北村さんの解釈を前提とすると、私のように研究対象者でありながら研究者の立場にもなる場合は、どちらの要素も必要なのかもしれないと思いました。ワークショップに参加する時には参加型アクションリサーチであることを第一とし、研究としてまとめるためには参与観察の視点で自分の行動も含めて過程全体を見つめ直し、自分が気付いたことが観察結果なのか、実践することで理解や変化したことなのかを問い直す必要があるのかもしれません。

対話を通じて改めて整理して振り返ると、私が出来ていたという自信はありませんが。

北村：実践と研究の両方にまたがる活動は既にお二人もしていますよね。個々の研究者が自分の専門性から半歩外に踏み出して地域協働に取り組み、そこで得た知見を専門分野に還元する「ハーフシフト」¹⁶⁾の重要性を伊藤さんは提案し¹⁷⁾、自ら実例を示しました¹⁸⁾。宇都宮さんのお仕事もまさにハーフシフトですよ¹⁹⁾。その過程の側面支援にも参加型評価研究が使える気がします。

伊藤：今回、私たち著者も初めての試みでしたから問題は少なかったのですが、MSC 実践経験者が初心者と一緒に参加型評価を行う場合、経験者のほうがより共感の得やすい具体的な物語を語ってしまうことには意識しておいたほうがいいと思います。問いの意図が十分に伝わらずに回答した参加者がいたことで、その物語への得票が集まりにくい傾向がなかったか、注意しておいたほうがいいですね。

北村：関わる人それぞれの役割に加えて、手法への馴染み方の度合いの差も考察対象になるということですね。確かに大切な視点だと思います。

3-4. 参加型評価の活用

北村：参加型評価、あるいは我々が使った水平型 MSC 手法を使うのに適した場面は何でしょうか？あるいは逆に適さない場面はあるのでしょうか？ MSC 手法の強みと弱みを踏まえた活用の仕方、という論点でも構いません。

宇都宮：私は水平型 MSC を含む MSC という手法は、汎用性が高い方法だと考えています。そのため、色々な場面での活用を考えることが出来ると思うのですが、ファシリテーターの役割が重要であることと、参集者の範囲、必要な時間を考えておかないと、上手く機能しないのではないかと考えています。評価すべき事業や分野、事象とその関係者を選定し、適切な問いかけを作れるかどうか重要な点で、ここを間違えると、何かの結果は出ても、得られるものが少ない気がします。具体的な活用場面としては、地域づくりや里山里海の環境保全など、多様な主体による連携を持続的に続けることが重要な活動で、連携主体が集まって活動の評価をしたり、次の共通目標を定めたりする場面では、有効に活用できると考えています。珠洲市が目指す「自然と共生する社会」を目指し、地域の住民と連携した取り組みを推進している現在の業務でも、生態学的な研究と併せて、より効果的な生態系保全につなげる活動を社会面で評価し、目標を共有することができる方法の一つとなるのではと期待しています。

北村：評価方法の設計から実施過程の進行管理、そして分析、報告までファシリテーターが重要な役割を持つことは間違いないですね。一般的なファシリテーション技術に加え、参加型評価ならではの検討も必要です。参加者それぞれの異なる評価結果を相互に尊重しながら共有できるような進め方がその一例です²⁰⁾。絶対的な「正解」のない方法論なので難しいですが、僕も経験を積んで上達したいと思っています。

伊藤：この手法の弱みと潜在的な強みについてですが、MSC では最後に投票で一番共感を得たエピソードを選択しますよね。この共感のプロセスが軸になってプロジェクトの評価がされるわけなんですけど、必ずしも一つに絞る必要があるんだろうかと研究しながら考えていました。似たようなエピソードが提出されるよりも多様なエピソードが生まれるプロジェクトの方が多面的で複雑な社会課題の対応に成功していると捉えられるかもしれない。ただそれだけだと「たくさんエピソードがあっていいよね」に留まるといけないので、例えば複数のエピソードに投票できるようにしたらより多面的な評価がしやすくなるかもしれないですね。エピソードの多様性指数を算出し複数のプロジェクト間や時系列で比較するとか。これは生態学者の悪い癖かな。

北村：その違和感はおそらく「MSC あるある」です。僕自身も、MSC 手法を習得する過程で同じ疑問を持ち、講師の田中博さんの説明を聞いて初めて納得しました。それは、「一つだけ選ぶにはすべてを丁寧に読まなくてはならず、そこに意義がある」ということでした。ワークショップで実際に一つに絞って投票する経験をした宇都宮さんはどう感じましたか？

宇都宮：私は、投票結果というより投票をするという過程に重要性があるように感じています。投票を義務付けることで、他の参加者のエピソードを読む意識が変わるのではないでしょう

か。このことは、相互の視点や考えを知る上で、とても意味のあることだと思います。ただし、参加者やエピソードの数が多い時は、複数選択可や上位3つのエピソードを順位付けして投票するなどの方法が加えられても良いと思います。そのメリットとして、参与観察の要素をもとにした理系的発想かもしれませんが、参加者各自の属性と投票行動を定量化して分析を試みることで、最多得票のエピソードの支持層に偏りがあるのか、参加者の属性で投票先に特徴が出るのかというようなことがわかるのではないのでしょうか。このような情報の把握が出来れば、その回のMSCの特徴や考察も深められ、MSC自体の発展や評価につながっていく気がします。

北村:「読む意識」の変化を実感されたのであれば目的は果たされたわけですね。いずれにしても、客観性でなく学び合いが最大の狙いということです。そのうえで、多様度を分析するという伊藤さんの発想や、複数選択によって属性と投票行動の関係性を分析するという宇都宮さんの発想はとても興味深いです。僕にはそこまでの視点はありませんでした。「さすが自然科学者、そう来たか!」と一本取られた気がします。

伊藤:MSCのプロセスから得られる学びが重要だという意図を、参加者や結果を受け取る人々、特に上位の意思決定に携わる人に丁寧に説明することが重要ですね。投票結果が独り歩きして、得票数の多い重要なエピソード以外はさほど重要ではない、という誤ったメッセージが伝わらないように注意深く扱う必要があると思います。

北村:確かにそのとおりですね。同様の方法をまた使うときがあれば、事前、実施中、事後の各段階での伝え方をさらに意識しようと思います。

伊藤:私は現在岐阜大学で「フューチャーセンター」(FC)という参加型手法を学ぶ講義科目を同僚の教員と一緒に担当し、多様な意見の共有や将来の方向性の議論を促進する場づくりを学生と実践しているのですが、そこで用いられるグループワークの手法は付箋と模造紙を使ったKJ法なんです。FCを何回か実践するなかで、未来につながる議論をするためには意見を出し合うための「お題」の設定が肝だと感じています。MSCで投げかけられた表1のような「4つの問い」は、参加者の相互理解を促す目的で行うFCでも活用できると感じています。では水平型MSCならではの強みは何なのか。それはおそらく時間をかけてエピソードを記述する過程と読み込む過程にあると思います。FCのようなワークショップの場では時間的制約のため瞬発性や簡潔性が求められていて、ゆっくりじっくり人の話に耳を傾けるのが難しい。なのでMSCではその強みにより焦点を当てる工夫が必要かと思っています。

北村:適切な度合いでじっくり考え、共有するよう柔軟に設計できるのが水平型MSC手法の強みのようですね。一般的にワークショップでKJ法として用いられているのは、発想を書き出した付箋紙を分類したり、論理構造として整理したり、という部分だろうと思います。実は僕も今回の水平型MSC手法で、投票前に物語の分類をするほうがよかったかもしれないと考えたことがありました。なぜなら、類似する物語が複数ある場合、それらの物語が示す変化は代表的なものであるかもしれないのに、票が割れてしまう可能性があるからです。でも、やはり分類をしないほうがよかったと、後になって確信しました。似ていても個々の物語の文脈は違い、それぞれを丁寧に読み込むことに最も大きな意義があります。本稿で我々3人のMSCを集めたときの伊藤さんの「これぞMSCの醍醐味」という感想が言い得て妙でした。分類するのは次の段階、つまり具体的な計画策定などのときで十分と感じています。そして、集まった物語の要素を丁寧に掘り下げながら分析するのであれば、その際には、図書カードのような形態のデータベースとして情報を自在に操りながら整理・分析する元来のKJ法も参考になりそうです²¹⁾。

宇都宮:MSCもしくは水平型MSCで注目すべき特徴は二点あると考えています。一つはエピソードを作る過程で自己評価や将来展望が表在化することだと思います。もう一つは、投票という形式を入れることで、自己完結で終わらず、参加者同士で視点や考えを共有出来ることです。この二点は、連携主体が事業を主体的に自己評価し、将来的な事業の方向性や連携体制の検討をする時に重要な役割を果たすのではないのでしょうか。エピソード作りは、評価軸や評価項目を設定し、数値で示せない重要なことも評価の対象として提示できることになると考えています。投票は、その評価軸や評価項目の妥当性を参加者で判断する作業になってい

る気がします。この視点から考えると、参加型評価として協働事業をMSCで評価することは、評価する視点の確認やモニタリングすべき点、アウトカムの示し方などにつながると考えられます。

伊藤：協働事業の実施側がこれまで意識していなかった評価観点を、公式の評価項目に取り上げるきっかけになるということですかね。そういう意図からすると、人材育成事業の受講生・修了生もMSCの参加者に含まれるとより違った観点が見えてくるかもしれませんね。

宇都宮：そうですね。受講生・修了生の他に、サポートしていただいた支援ネットワークの方々や、他の自治体で担当者として関わった方々も参加者の候補ではないでしょうか。対象を広げ過ぎかもしれませんが、何度もお越しいただいた講師も参加候補になるかもしれません。MSCも二通り考えられるので、今回参加していなかったグループの方々が冒頭のエピソードに投票する従来型のMSCと、エピソード作りから実施して水平型のMSCを実施するなど、参加者と方法の組み合わせで多様なバリエーションがありそうです。それでも出てくるエピソードが似ているのか、全く異なるのか、立場によって支持されるエピソードはどんな特徴があるのかなどは興味深いですね。また、何回か繰り返すことで、今後の事業で大切にすべき点や改善点に気付きやすくなるのではないかと考えています。意欲とスキルのあるファシリテーターを探すのが第一関門になることは重々承知ですが、MSCの可能性を考える研究にもなりそうだと思います。

3-5. 発信における形式

北村：参加型評価の実践報告を英語論文にした際には、投稿先雑誌の指定に従って一般的な学術論文の形式を用いました。一方、本稿は2部構成で前半と後半の記述方法が完全に違うなど、かなり独特の形式になっています。この形式で書いてみて率直に感じたことは何ですか？

伊藤：理系分野の学術論文では如何に簡潔、客観的に結果を記述し、過不足なく適切に考察するかが大事だと訓練されてきたので、北村さんからこの提案を受けたときは正直面を食らいました。ですが、ナラティブであるからこそその知的創造が可能で、それを一番よく読者と共有できる方法が座談会形式であるならば有効だと思います。例えば対話のなかで探索的に事象を分析し答えを見つけ出そうとするときには、議論の過程を読者に見せながら伝えられるのでふさわしいかと思う。ただそのためには話者がどのような人物・立場で、どのような前提条件でその言葉を発しているのかが読者と共有されないとモノローグになってしまいかねない。座談会方式で過不足なく文脈を伝えることの難しさを感じます。

北村：話者の人物・立場や発言の前提条件を示すことの大切さについてのご指摘に、はっとさせられました。僕にその意識が十分になかったことを、恥ずかしながらこの段階で気付きました。やり取りのなかで僕の立場すら代わりに説明してくれていた真意はそこにあったのですね。読者向けに種明かしすると、座談会形式の冒頭に自己紹介を入れたのは、この伊藤さんの指摘を受けてからの「後付け」です。ファシリテーター役の僕が最も意識すべきところ、気の回らなかった部分を補ってもらい感謝します。チームで取り組んだことにより、たくさんの気付きをもらった実践研究でした。それを象徴するオチになりました。

宇都宮：確かに理系の論文ではなかなか経験できないことだと思います。実際にやってみると、対話形式で書くこととMSCは共通点がありそうだと感じました。自分の言葉で文章を書き、それを共著者で共有するところは、エピソード作りとそのエピソードを読んで考えを共有する過程に似ていると感じるからです。もちろん、考察として耐えうるものになるようになっているのか、自問自答しながらの部分もあり、この分野の素人同然の立場として、十分な議論となっているのか不安もあります。

伊藤：通常、研究論文って出版されたら終わりなんですが、論文の成果を著者たちで振り返り、社会に還元していく過程が「生まれた論文を育てる」営みのように感じました。税金をもとに運営・雇用されている事業・研究者の社会的責任や情報発信がより求められる時代の中で、こうしたやり方もあるのだと参考になると思いますよ。

北村：なるほど、育てる営みというのは魅力的な表現ですね。その気付きは、「本稿を書いたことによって生じた重要な変化」の一つかもしれません。もし、このような変化を再びMSCとし

て見比べたなら、きっと僕から 1 票入ったことでしょう。ともあれ本稿は、形式も内容も、現時点の我々なりの試作品であって完成形ではないので、我々の間でも対話を続けていきたいですし、読者の感想も聞きたいです。批判も甘んじて受けたいと思います。本稿が一つのきっかけとなって対話と学び合いの輪が広がれば理想です。ありがとうございました。

引用文献

- 1) Kitamura, K., Utsunomiya, D. & Ito, K. (2020). Participatory evaluation of community-university collaboration programs: A case study of Noto, Japan. *Journal of Community Practice*, 28(4), 403-415. <https://doi.org/10.1080/10705422.2020.1841054>
- 2) 源由理子 (2016). 参加型評価—改善と変革のための評価の実践—. 晃洋書房.
- 3) Patton, M. Q. (2011). *Developmental evaluation: Applying complexity concepts to enhance innovation and use*. Guilford Press.
- 4) Saari, E. & Kallio, K. (2011). Developmental impact evaluation for facilitating learning in innovation networks. *American Journal of Evaluation* 2011 32(2), 227-245. <https://doi.org/10.1177/1098214010387658>
- 5) 能登地域 GIAHS 推進協議会 (2016). 能登の里山里海 GIAHS アクションプラン 計画実施期間：平成 28 年度～32 年度 (2016 年度～2020 年度) .
- 6) 中村浩二, 嘉田良平 (2010). 里山復権～能登からの発信～. 創森社.
- 7) 中村浩二, 北村健二 (2018). 人材が育つしくみ—里山マイスターがもたらすもの. 佐藤哲, 菊地直樹 (編) 地域環境学—トランスディシプリナリー・サイエンスへの挑戦—. 東京大学出版会, pp.188-203.
- 8) 山口泰博 (2019). カモメが飛んだ里海で、能登里山里海マイスター修了式. 産学官連携ジャーナル, 15(5), 8-9. https://www.jstage.jst.go.jp/article/sangakukanjournal/15/5/15_8/_pdf/-char/ja
- 9) 科学技術振興機構「地域再生人材創出拠点の形成 事後評価 「能登里山マイスター」養成プログラム」 <https://www.jst.go.jp/shincho/database/pdf/20071400/2011/200714002011rr.pdf> (2020 年 12 月取得)
- 10) 総務省「平成 24 年度地域づくり総務大臣表彰について」 https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/hyousyou_h24.html (2020 年 12 月取得)
- 11) 全国イノベーション推進機関ネットワーク「イノベーションネットアワード」 <https://www.innovation-network.jp/award/> (2020 年 12 月取得)
- 12) Davies, R. & Dart, J. (2005). Most Significant Change (MSC) Technique: A guide to its use. <http://www.mande.co.uk/docs/MSCGuide.htm> (2018 年 4 月取得). 日本語版は以下のサイトから入手可能. <http://blog.livedoor.jp/sankagatahouka/MSCGuide-Japanese-2013.pdf>
- 13) 田中博 (2014). 参加型モニタリング・評価手法 MSC (Most Significant Change) —バングラデシュ NGO の実践から 4 つの特色を考察する—. *日本評価研究*, 14(2), 61-77.
- 14) One Village Partners. (2016). Most Significant Change. <http://onevillagepartners.org/mostsignificant-change/> (2018 年 4 月取得)
- 15) 北村健二 (2015). 共に暮らす、共に働く、共に感じる. *Humanity & Nature Newsletter*, 55, 12. https://www.chikyu.ac.jp/publicity/publications/newsletter/img/newsletter_55_2.pdf (2020 年 12 月取得)
- 16) 敷田麻実 (2010). 専門家の創造的な働き方としてのハーフシフトの提案—科学技術コミュニケーターとしての隣接領域での無償労働. *科学技術コミュニケーション*, 8, 27-38.
- 17) 伊藤浩二 (2015). 地域再生を担う社会人養成と大学コーディネーター. *大学地域連携研究*, 2, 13-20.
- 18) 萩野由紀, 伊藤浩二 (2014). 土地に根ざした学びの場「まるやま組」の活動をとおして. *農村計画学会誌*, 33(1), 50-52.
- 19) 宇都宮大輔 (2017). 能登半島最先端の里山里海を将来に継承するための地域づくり. *情報誌グローバルネット*, 2017 年 9 月号 <https://www.gef.or.jp/globalnet201709/globalnet201709-5/> (2020 年 12 月取得)
- 20) Patton, M. Q. (2018). *Facilitating evaluation: Principles in practice*. Sage.
- 21) 川喜田二郎 (1967). 発想法—創造性開発のために—. 中央公論社.